『西南アジア研究』No.46, 1997

古代ペルシア語および王朝アラム語における「都市」

春 田 晴 郎

はじめに

ハカーマニシュ朝ペルシア(前550-前330)の領土内には,バビロン,スーサ,ペルセポリス,サルデイスなど,多くの「都市・まち」が存在した。当時使用されていた諸言語では,これらの「都市・まち」に対してどのような語をあてていたのであろうか。この問に答えることは,実はそれほど容易ではない。なぜなら,従来の研究は「この語は何という意味なのか」を知ることに力が注がれ,先述のこれとは逆方向の問には,あまり関心が向けられてこなかったからである。しかしながら,1995年には *Semitica* 43-44号の特集「紀元前1200年からヒジュラまでの都市」で西セム諸語(および南アラビア語,ヒッタイト語)における「都市」が扱われるなど,概念から(複数の)語,という研究方法もようやく進展しはじめた[1)]。

本稿では,ハカーマニシュ朝の主要言語として,古代ペルシア語,アッカド語,王朝アラム語,そして帝国西方での主要言語でもあるギリシア語を取り上げ,これらの言語で「都市・まち」をどう表現したか,を明らかにする。古代ペルシア語,アッカド語は,ダーラヤワウ1世のBīsotūn碑文など王碑文に用いられている言語であり,王朝アラム語は帝国行政実務上の最も重要な言語である。もう一つ重要な言語としてエラム語も用いられていたが,私の力量上,これについては本論で触れることができなかった。

以下,まず,「都市・まち」を表わす語が明確なアッカド語・ギリシア語について述べ,そこで「客体としての都市」「行為主体としての都市」という2つの意味を明らかにする。次いで,古代ペルシア語,王朝アラム語について,この2つの意味それぞれについて検証する,という構成を取る。末尾の付録では旧約聖書「エステル記」における「都市」という語について同じ視点から論じる。

I 「都市」の2つの意味——アッカド語とギリシア語の場合——

アッカド語で「都市・まち」を表わす語は,*ālu* であり,通常はスメログラム URU と書かれる。URU は都市名の前の限定辞としても,きわめて頻繁に用いられる。一方,ギリシア語における「都市」は,もちろん,polis である。なお,URU(*ālu*),polis とも,かなり小規模な居住地に対して用いられることもあり,必ずしも現代における「都市」とは一致しないことを確認しておく。

さて，アッカド語 *ālu* とギリシア語 polis は，きわめて重要な共通点を有している。それは，両語とも，「客体としての都市」「行為主体としての都市」という 2 つの意味を持っていることである。前者は，居住地としての「都市」あるいは征服・略奪の対象としての「都市」であり，ごく普通の意味である。後者は，例えば，法的行為の主体としての「都市」である。「ポリス」についてのその用例を挙げる必要はないだろう [Liddell & Scott : *πόλις* III]。アッカド語 *ālu* についての例は，ハンムラビ法典24条などを挙げることができる [Roth 1995 : 85]。

「客体としての都市」を表わす語は，「都市」が存在すれば各言語に存在するであろう。しかし，「行為主体としての都市」という語については，他言語でも，「客体としての都市」と同一の語を用いているという保証はない。この 2 つの意味が同一の語で表現されるという点で，古代メソポタミア文明を代表する言語であるアッカド語と古典古代文明の代表，ギリシア語は共通している。しかし，他の古代言語における「都市・まち」という語を考察していく際には，「行為主体としての都市」をどう表わすのか，という観点も必要になってくる。以下，古代ペルシア語や王朝アラム語について検討するが，その前に考察の材料となる基本史料について述べる。

II 基本史料

前章で述べたように，アッカド語とギリシア語における「都市・まち」という語は，明確である。したがって，これらの 2 言語のどちらかと古代ペルシア語や王朝アラム語の 2 言語の少なくともどちらかを含む 2 言語・3 言語碑文を史料の中心に据えて対照するのが，後者の言語での「都市」を考察する際にも適当であろう。

本稿では，古代ペルシア語については，ダーラヤワウ 1 世の Bīsotūn 碑文を中心に扱う。これは，古代ペルシア語版 [Kent 1953 ; 伊藤 1974 : 22-53]，アッカド語版 [Voigtlander 1978] およびエラム語版 [Grillot-Susini, Herrenschmidt & Malbran-Labat 1993] からなる 3 言語碑文で，さらにエジプトで発見された王朝アラム語による写しの断片 [Greenfield & Porten 1982] も存在する。

王朝アラム語については，Bīsotūn 碑文の他，アナトリア南西部リュキアのクサントスで発見されたギリシア語，リュキア語，アラム語からなる 3 言語碑文 [Metzger et al. 1979 ; 松本 1983] [2] を中心に，その他の碑文も併せて考察していく。

III 客体としての都市

1 古代ペルシア語

古代ペルシア語碑文に現れる語の中で「都市・まち」を指すと考えられる語は，vṛdana-, didā-, āvahana- である [Kent 1953 : 55-56]。Bīsotūn 碑文でこれらが用いられる地名は，アッ

カド語版の相当する箇所では，URU という限定辞が付けられている[Kent 1953：116-135；伊藤 1974：22-53；Voigtlander 1978]。

以下，この3語について述べるが，その前に，一つ指摘しておくべきことがある。それは，これらの語を，本論冒頭で挙げたようなエクバタナ，バビロン，サルデイスなどの大きな都市に対して用いている例が見つかっていないことである。例えば，Bābiru-（バビロン）は都市としても州（dahyu-；Ⅳ章で後述）としても用いられているが[Kent 1953：56, 199-200]，「都市バビロン」という表現は知られていない。また，一度固有名を挙げた後，「その都市」という言い回しで受ける例も見あたらない。これは古代ペルシア語史料の絶対的不足にもよるのであろうが，「都市・まち」という語を考察する際の大きな制約になる。

さて，先に挙げた3語に戻る。vṛdana- は，Bīsotūn 碑文では9つの地名に対して用いられている（§19, Zazāna-；§25, Māru- など）[3]。Kent（1953）は'town'，伊藤（1974）は「町」と訳している。用例数から言えば，「まち」を表わす最も普通の語となるだろう。

didā- は，5つの地名に付随して現れる（§13, Sikayauvati-；§27, Tigra- など；§32はここには含めない）[4]。Kent 訳は 'fortress'，伊藤訳は「城塞」となっている。これらの語は「都市の内城；イスラーム時代のカルア qal'a，クハンディズ quhandiz」なのか，それとも「まち，城壁に囲まれたまち」を指しているのだろうか。私は，以下の3つの理由により，「まち」そのものを指していると考える。1点目の理由は，この5つの地名がまちの構成要素ではなく戦場として現れ，アッカド語版でも接頭辞 URU が付くから，「内城」のみを指すとは考えがたいことである。2点目は，Bīsotūn 碑文 §32に，この didā- という語が都市（Hagmatāna- エクバタナ）の「内城」という意味で用いられているが，こちらはアッカド語の *birtu*「城砦」と対応していて §32以外の URU に対応している例とは明確に区別できることである。最後に，次に述べるように王朝アラム語の byrt' の用例も，Bīsotūn 碑文において対応する古代ペルシア語 didā- に援用できる可能性が高い。

āvahana- は，Kent（1953）が 'village'，伊藤（1974）が「集落」と訳している語である（§26, Zūzahya- の一例）。この語は，のちに借用語や中期イラン語で「宿駅」を意味するようになる[Henning 1952：520]。Bīsotūn 碑文における āvahana- も単純な「村落」「集落」ではない「宿駅」を表している可能性がある[Rundgren 1965：75-79]。

以上の語は，すべて，戦場など「客体」として用いられている。

さらに，一例アッカド語の URU に対して，Ⅳ章で述べる古代ペルシア語 dahyu-「くに」で対応している例がある（§25, Kampanda-）。これが小さな異同なのか，それともこの dahyu- を実際には「まち」と解釈すべきなのかどうかは現段階では保留しておく。

2 王朝アラム語

アラム語で本来「都市・まち」を表わす語は，qryt' であろう[Lemaire 1995：24-25][5]。しかし，この語は，ハカーマニシュ朝時代には，エジプト，エレファンティネ島出土のパピルス史

料における「市民」b'l qryh という表現以外には，ほとんど現われない[Cowley 1923：No. 5 l. 6 ； No.13 l.10 etc.]。

では，王朝アラム語史料に頻出する「都市・まち」を表わす語とは，どのようなものだろうか。

まず，Bīsotūn 碑文のアラム語版から見てみる。これはごく一部のみが残存しているのみであるが，それでも古代ペルシア語版・アッカド語版と比較すると以下のような注目すべき点がいくつか明らかになる。

古代ペルシア語で，vṛdana- が付される地名（§23, Māru- ；§31, Kunduru- ；§41, Raxā-）は，アラム語版では固有名詞のみで「まち」に相当する語が全く付いていない [Greenfield & Porten 1982：22, 32, 38]。このことは，古代ペルシア語の vṛdana- の性格と関連しているのであろうが，詳細はわからない。

古代ペルシア語 āvahana- に当たる部分は欠損している。

didā- のみが，アラム語版でも対応する単語を有している。これが，byrt'（brt'）である[Greenfield & Porten 1982：28, 44][6]。さて，以降は Bīsotūn 碑文以外の史料も含めて，この語を考察していこう。byrt' は，アッカド語 *birtu*「城砦」からの借用語であり，訳語としてはやはり「城砦」fortress が一般に与えられてきた。しかし，近年，Lemaire & Lozachmeur の研究によって，byrt' は，「城壁を繞らせた都市」ville forte をも意味することが明らかにされてきている[Lemaire & Lozachmeur 1987；Lemaire & Lozachmeur 1995][7]。

Lemaire らは，まず，byrt' がハカーマニシュ朝下のさまざまな地域から出土した史料に見られることを示した後，サマリア出土の未公刊パピルスにおいて，qryt' と bryt' が同じ意味で用いられている例を指摘し，これにリュキア，クサントス出土の 3 言語碑文でも polis に対応する語として現われることなども加えて，この解釈を出している[Lemaire & Lozachmeur 1987][8]。彼らが挙げている，bryt' が付される地名には，地方の代表となる「都市」が多く含まれていることを，ここで付記しておく。すなわち，リュディアの都城サルデイス Sprd byrt' [*KAI* No.260；Lipiński 1975：153-161][9]，リュキアの都城クサントス 'wrn byrt'[Metzger et al. 1979：136-137, 139-140；松本 1983：102-103][10]などである。この他にも，byrt' が，キリキアに位置する Meydancıkkale 出土碑文[Davesne, Lemaire & Lozachmeur 1987：366-372]やエジプト・アスワンのエレファンティネ島から出土したパピルス[Cowley 1923]，さらにはイラン東部のアラコシアからペルセポリスに奉納された器物の銘文（したがって，ここに記される byrt' 名はアラコシア方面の地名と想定される）[Bowman 1970][11]などに現われるのは，Lemaire & Lozachmeur（1987）の述べるとおりである。

以上をまとめれば，王朝アラム語において，「都市・まち」を表わす通常の語は byrt' であったと言えるであろう。また，ここに挙げた用例はすべて文書の記された，あるいは布告の行なわれた場所など「客体」としてのものであり，行為の主体に byrt' が立っている例はない。

なお，byrt' がかなり大きな都市に対しても使われることと，Bīsotūn 碑文において古代ペルシア語 vṛdana- に相当する語がアラム語版には現われないことから，古代ペルシア語におい

ても，didā- が大きな「都市」についても用いられたという可能性はある。しかし，とくに小アジアのアラム語碑文は帝国末期（前4世紀後半）のものが多いなど，二百数十年というハカーマニシュ朝の長い支配の間での変化も考慮に入れなければならず，強く主張することはできない。

Ⅳ　行為主体としての都市

「行為主体としての都市」の確実な用例は，古代ペルシア語碑文には見出せない。

一方，王朝アラム語については，クサントス出土の3言語碑文が重要な材料を提供する。

この碑文のギリシア語版には，2ヶ所 polis が現われ，そのどちらもが「行為の主体」としての用法である（以下，ギリシア語版［Metzger et al. 1979：32-33；松本 1983：101-102］とアラム語版［Metzger et al. 1979：136-137；松本 1983：102-103］の比較）。

1ヶ所は，12行目以下で，「ポリスは，ケシンデーリスとピグレースが作り上げた土地を献上した……」という例である。アラム語版は，この部分は完全には対応しておらず，11行目以下，「クサントス（オルナ）市民は，献上した」b'ly 'wrn yhbw ... と「市民」が主語になっている。「都市」が主体か「市民」が主体か，というのも興味深い課題であるが，ここではこれ以上触れない[12]。

もう1例が，ポリスに対応するアラム語の例として貴重である。ギリシア語版15-17行目，「毎年，1ムナ半がポリスから（*παρὰ τῆς πολέως*）与えられる」と受動態における動作主として polis が現われている。これに対して，アラム語版12-14行目では，「毎年，mt'（mātā）から1ミナ半の銀が与えられた」（wšnh bšnh mn mt' yhybn）とポリスに対して mt' という語が対応している[13]。

A. Dupont-Sommer が述べるように，この mt' が「クサントス（オルナ）市」を指すことは確実である［Metzger et al. 1979：148］。しかし，王朝アラム語 mt' は，「都市」ではなく「地方，州」を表わす語として一般に解釈されている。また，クサントス碑文では，3行目に byrt' いう語が用いられているのに，ここでは使われない。この点をどう説明したら良いのであろうか。

byrt' については，この語は「行為主体としての都市」としては，用いることができなかったのではないか，と私は推測する。そして，そのため，「行為の主体」になりうる別の語を充当した，それが mt' ではないだろうか。アラム語 mt' は，アッカド語 *mātu* からの借用語で「くに」を表わす。Bīsotūn 碑文においては，次に示すように古代ペルシア語 dahyu- に対応する語として用いられている。この碑文では，反乱の後に「そののち，そのダフユは私のものとなった」という表現が何度も現われるが，その中で §§ 37,48については，アラム語版に対応する部分が現存し，「そののち，その mt' は私のものになった」［Greenfield & Porten 1982：32, 46］と表現されている。

このように，王朝アラム語 mt' は古代ペルシア語 dahyu- にあたるのであるが，このダフユ

は「くに，くにの人々」を表わす語である。Bīsotūn 碑文§6には，ダーラヤワウ1世に帰属した，パールサ，ウーウジャ(エラム)，マーダ(メディア)など計23の「ダフユ」が列挙されている。「ダフユ」については佐藤進氏の論文[佐藤 1969]をはじめとする諸研究の結果，Vogelsang のまとめるように，「近年では，この語は通常'land / people' と訳され解釈されてきている」[Vogelsang 1992：170]。ここで，注目すべきは，「くに，地方，州」を意味する dahyu- は，「客体」として用いられるのみならず，「行為の主体」としても現われる，ということである。これが 'land / people' の 'people' という訳語になる。Bīsotūn 碑文では，何より，「反乱・離反する主体」としての「ダフユ」が頻出する[§§11, 21, 38など]。

王朝アラム語における mt' も古代ペルシア語 dahyu- と同様だったのであろう。そして，クサントス碑文 15-17 行目では，「主体としての都市」を表わすのに，語源的には「都市」とは異なるが「主体」として用いることができる mt' を用いている，と考えれば，ギリシア語版 polis との対応も説明できる[14]。

V 結　論

本稿のテーマについて，「主体としての都市」の用例が現存する王朝アラム語と，アッカド語，ギリシア語とを比較すれば，次のような結論が得られる。

1．アッカド語，ギリシア語では，「客体としての都市」と「行為主体としての都市」を同一の語で表わす。アッカド語では *ālu* (URU)，ギリシア語では polis である。

2．王朝アラム語では，両者を別の語で表現する。「客体としての都市」は本来「城砦，内城」を意味する byrt'，「行為主体としての都市」は本来は「くに，地方」を意味する mt' を用いる。

古代ペルシア語については，大規模な「客体としての都市」を表わす語および「主体としての都市」を表わす語が確認できないので，王朝アラム語のような区別があったかどうかもわからない。didā- という語はアラム語 byrt' と同じく「城砦・内城」「まち」両者を意味しており，大規模な「客体としての都市」も意味していた可能性はある。vṛdana- も「客体としてのまち」を表わす語である。古代ペルシア語に「行為主体としての都市」がもし存在するなら，アラム語 mt' に対応する dahyu- であろう。既知の碑文の中の dahyu- にこの用例が存在する可能性もあるが，確実な例を挙げることはできない。

本稿で論じたのは，「都市そのもの」のあり方ではなく，「都市という語」についてである。したがって，上記の結論から，すぐに「共同体としての都市」云々へと結びつけるのは早計であろう。それよりも強調したいのは，「客体としての都市」と「行為主体としての都市」を別の語で表わす言語については，従来「都市」を意味するとは認識されていなかった語が，実は「都市・まち」を指しているケースが想定できることである。「都市」をキーワードにして史料を読む際には，このことを留意しなければならない。王朝アラム語 mt'，古代ペルシア語 dahyu- についてはさらに綿密な検討が必要であろう。

なお,「行為主体としての都市」という語の例は,アッカド語やギリシア語の場合でもそれほど頻繁に見られるわけではなく,「～人」とする場合の方がはるかに多い。さらに「都市」に関する他の語,たとえばギリシア語で「まち,市街」を表わす asty(これは政治的単位にはならない),も存在するなど[15],本稿の結論から「都市そのもの」のあり方を論じるのは,かなり危険である。しかし,以上の点に十分に留意しても,なお,「客体としての都市」と「行為主体としての都市」とを表わす語が別になる言語の例は,「都市,自治体,共同体」と法人格との関連を考える際には一つの参考になる,と私は考えている。

付録　エステル記における「都市」

旧約聖書「エステル記」ヘブライ語マソラ本文にも2種類の「都市」が現われる。本書は成立年代に関してハカーマニシュ朝時代説から前2世紀説まで多岐にわたり現在では定説が存在しないので,ハカーマニシュ朝時代を扱う本論とは別の付録にした[16]。しかし,扱われる問題は全く同一と言ってよい。

この物語は,スーサ(Šûšan)が舞台になっているが,このスーサは,次の2通りで表現される。

一つは,šûšan habbîrâ と bîrâ を用いるものである(1章2節ほか多数)。bîrâ は,アラム語 byrt'(bīrtā)に相当する語で,やはり従来は,fortress などと訳されることが多かった。Moore は,'acropolis of Susa' と訳し[Moore 1971 : 5],新改訳でも「シュシャンの城」となっている。しかし,'acropolis' という訳は,スーサ全体を指すとした方がはるかに理解しやすい2章5節「šûšan habbîrâ に一人のユダヤ人がいた」などを考慮すると受け入れ難い。また,ギリシア語訳でも,相当する部分は polis と訳されている(2章3節など)[*Esther LXX*][17]。新共同訳では「要塞の町スサ」と訳されていて,こちらの方が適当である。さて,ここで注目されるのは,šûšan habbîrâ は「スーサのまち」を表わしているのであるが,すべて「客体としての都市」の用例であることである。

もう一方の表現は,hā'îr šûšan と 'îr という語を用いる(3章15節,8章15節)。この語は「まち・都市」を表わす最も普通のヘブライ語であるが,「エステル記」では,先の bîrâ に比して回数は非常に少ない。新改訳では「シュシャンの町」,新共同訳では「スサの都」という訳で,訳そのものには問題はない。ただし,「エステル記」の2例の 'îr には重要な特徴がある。それはどちらの場合も「混乱に陥る」「喜ぶ」という「行為の主体」として用いられていることである[18]。

Lemaire & Lozachmeur は,2つの表現をパラレルなものと考えているが[Lemaire & Lozachmeur 1987 : 264],実際には,王朝アラム語の byrt' と mt' の場合と同様のことが推察できる。

すなわち,「エステル記」において,šûšan habbîrâ と hā'îr šûšan は,どちらも「都城スーサ」

を指すが, bîrâ は「客体としての都市」, 'îr は「行為の主体としての都市」という区別が設けられている。

ヘブライ語の 'îr は「客体としての都市」にも用いることができるのに, そうされていないことは, おそらく別の言語(可能性が高いのは王朝アラム語)の影響であろう。

※本稿は、平成8年度文部省科学研究費補助金奨励研究(A)による研究成果の一部である。

注

1) 同特集号の巻末の都市に関する語彙集も有用である[anonymous 1995]。

2) 残念ながらリュキア語版については, 私の能力を大きく超えるものであり, 十分に扱うことができなかった。なお, リュキア語版については, 日本語の訳注・語彙解説が存在する[大城・吉田 1990 : 233-239, 346-361]。また, この碑文の年代について, 報告者は前358年説を採り, 本稿で引用した文献もこれを踏襲しているが, 現在では前337年説が広く認められている[大戸 1993 : 235-237 n.12]。

3) エラム語版では, ^{h}HAL^{meš} に相当する[Grillot-Susini, Herrenschmidt & Malbran-Labat : 1993]。

4) エラム語版では, ^{h}halmarriš に相当する[Grillot-Susini, Herrenschmidt & Malbran-Labat : 1993]。

5) 本稿において, 王朝アラム語の単語は, 原則として, 限定相(強調相)の翻字形を用いている。史料ではこの形で現われることが最も多い。辞書の項目などでは, qryt', byrt', mt' ではなく qryh, byrh, mt となる。

6) Bīsotūn 碑文の写しでは, brt' と綴られている。しかし, 他の史料では byrt' であり, 以下, byrt' に統一した。

7) なお彼らは, アッカド語の *birtu* が北西セム語から借用した可能性も示唆している[Lemaire & Lozachmeur 1987 : 261-262]。

8) ただし, クサントス碑文では, byrt' が現われる部分は相当するギリシア語版・リュキア語版を持たないので, 直接逐語的にこのことが言える訳ではない。

9) この碑文はリュディア語との2言語碑文であり, リュディア語版については, 日本語の訳注・語彙解説が存在する[大城・吉田 1990 : 256-258, 361-372]。年代は, 前348年。

10) 'wrn は, クサントスの現地名(リュキア語 Arus-「クサントス市」; Arñna-「クサントス人」[大城・吉田 1990 : 236-237])を写した形。

11) なお, Bowman の銘文解釈は完全に誤っており, 現在では全く問題にならない。Vogelsang などを参照のこと[Vogelsang 1992 : 169]。

12) リュキア語版では, 12行目以下にあたり, 「市(teteri-)と近隣民」が主語である[大城・吉田 1990 : 234-237]。なお, アラム語版で「クサントス(オルナ)市民」は6行目にも現われるが, これに対応するのは, ギリシア語版(11, 5-6)が「クサントス人と近隣民」, リュキア語版(11, 6-7)が「クサントス(Arus)とクサントス人の近隣民」である[Metzger et al. 1979 ; 松本 1983 ; 大城・吉田 1990 : 233-237]。

13) リュキア語版では, 12行目以下にあたり, 「クサントス人(Arñna-)」が対応している[大城・吉田 1990 : 234-235]。

14) Hoftijzer & Jongeling によるアラム語の最新の辞典では, mt_1の意味として 'land, town (as political entity)'が挙がっている[Hoftijzer & Jongeling 1995 : Vol. 2 706-707]。

15) 1994年5月バルカン・小アジア研究会において, 本稿の元になった発表を行なった際, この語の存在に注意を喚起された篠崎三男教授に謝意を表する。

16) 「エステル記」が現在の形で成立した年代については, ヘブライ語マソラ版とかなり異なっているギリシア語訳(七十人訳)との関連も相まって, 論議が錯綜している[Moore 1971 : LVII-LX]。私は, Moore らとは異なり前2世紀の成立ではないかと考えているが, 本付録とは関係しないので, 詳細は省略する。なお「エステル記」のマソラ本文は, *BHS* を使用した。

17) 完全にテキストが対応しているわけではなく, 1章2節のように, ギリシア語訳では「都城スーサ」が抜けている場合もあるが, 少なくとも 'acropolis' と訳されている例はない。

18) 日本語訳ではわかりにくいが, これらの文の主語は, 'ir である。

参考文献

BHS : *Biblia Hebraica Stuttgartensia.* Stuttgart, 1967/77.

CIIr : *Corpus Inscriptionum Iranicarum.*

Esther LXX : Hanhart, R. ed. *Esther. Septuaginta : Vetus Testamentum Graecum* 8-3 (2nd ed.). Göttingen, 1983.

KAI : Donner, H. & W. Röllig, *Kanaanäische und aramäische Inschriften* I-III. Wiesbaden, 1962-1964.

Liddell, H. G. & R. Scott : *A Greek-English Lexicon.* New (9th) ed. Oxford, 1940.

anonymous (1995) Lexique. *Semitica* 43-44, 181-203.

Bowman, R. A. (1970) *Aramaic Ritual Texts from Persepolis.* Chicago.

Cowley, A. (1923) *Aramaic Papyri of the Fifth Century B.C.* Oxford.

Davesne, M. A., M. A. Lemaire & H. Lozachmeur (1987) Le site archéologique de Meydancıkkale (Turquie). *Comptes rendus de l'Académie des Inscriptions et Belles-Lettres* 1987 (avril-juin), 359-383.

Grillot-Susini, F., C. Herrenschmidt & F. Malbran-Labat (1993) La version élamite de la trilingue de Behistun : Une nouvelle lecture. *JA* 281, 19-59.

Greenfield, J. C. & B. Porten (1982) *The Bisitun Inscription of Darius the Great : Aramaic Version. CIIr* 1-5-1. London.

Henning, W. B. (1952) A Farewell to the Khagan of the Aq-Aqatārān. *BSOAS* 14, 501-522.

Hoftijzer, J. & K. Jongeling (1995) *Dictionary of the North-West Semitic Inscriptions I-II. Handbuch der Orientalistik* 1-21-1, 2. Leiden.

伊藤義教(1974)『古代ペルシア』岩波書店.

Kent, R. G. (1953) *Old Persian : Grammar, Texts, Lexicon* (2nd ed.). New Haven.

Lemaire, A. (1995) Villes, rois et gouverneurs au Levant d'après les inscriptions monumentales ouest-

sémitiques (IXe-VIIe siècles av. J.-C). *Semitica* 43-44, 21-32.

Lemaire, A. & H. Lozachmeur (1987) *Bīrāh / Birtā'* en araméen. *Syria* 64, 261-266.

Lemaire, A. & H. Lozachmeur (1995) La *Birta* en Méditerranée orientale. *Semitica* 43-44, 75-78.

Lipiński, E. (1975) *Studies in Aramaic Inscriptions and Onomastics.* Leuven.

松本克己(1983) クサントスのレートーオン出土の三言語併用碑文とリュキア語研究の現状『オリエント』26(2), 95-118.

Metzger, H., E. Laroche, A. Dupont-Sommer & M. Mayrhofer (1979) *La stèle trilingue du Lêtôon. Fouilles de Xanthos* VI. Paris.

Moore, C. A. (1971) *Esther. The Anchor Bible* 7 B. Garden City, New York.

大城光正・吉田和彦(1990)『印欧アナトリア諸語概説』大学書林.

大戸千之(1993)『ヘレニズムとオリエント』ミネルヴァ書房.

Rundgren, F. (1965) Aramaica I. *Orientalia Suecana* 14, 75-88.

Roth, M. T. (1995) *Law Collections from Mesopotamia and Asia Minor.* Atlanta.

佐藤 進(1969) ダフユとサトラペイア『オリエント』12(3-4), 23-42.

Vogelsang, W. J. (1992) *The Rise and Organization of the Achaemenid Empire : The Eastern Evidence.* Leiden.

Voigtlander, E. N. von (1978) *The Bisitun Inscription of Darius the Great : Babylonian Version. CIIr* 1-2-1, London.

(東海大学文学部)